妖術記

河野多恵子

角川書店

妖術記

河野多恵子

角川書店

妖術記
河野多恵子
1978年11月20日　初版発行

発行者　角川春樹
発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見　2—13—3
電話　東京(03)265-7111(大代表)
郵便番号 102　振替東京3-195208
印刷・製本　大日本印刷株式会社
© Taeko Kouno 1978
Printed in Japan
0093-872232-0946(0)

妖術記

裝丁

門

坂

流

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その頃、わたしの当面の願いは、自分の労働時間を半分だけ買ってくれるところはないか、ということであった。それが、家でできる仕事であれば何よりだが、出かけてゆく仕事であっても止むを得ないと考えていた。

実をいえば、わたしには売るような時間はないはずだった。買えるものならば、むしろこちらが買いたいほどなのだ。毎日のすべての時間を一日も早く作家として世に出るために用いたかった。わたしは、もう三十歳を過ぎかけていた。今となれば、三十歳という年齢はこの世のたっぷりした時間をまだ幾らも消費していない時期のようにわたしには思えるけれども、それはこの世の時間というものが本番ではどのような過ぎてゆき方をするものであるか……つまりどのようなものと、どのような交換のされ方をしてゆくものであるかを経験してみて、そう思うようになったことだ。当時のわたしは、三十歳になっても世に出られずにいるわが身を思うたびに、狼狽(ろうばい)に奇声を発したいくらいだった。

自分には才能がないとは、わたしにはどうしても思えなかった。才能がないのではあるまいかと自分に問い詰めるだけの勇気は、とてもなかったのであろう。才能がないのだと断じなければならなかった時、どうなるのか。人生は、人間が生まれるのと同時に始まるものではない。見方によっては、殆どの小学生にも、まだ人生は始まっていないといえる。境遇次第では、早くに人生の始まる場合もあるであろうが、大方の人たちにとっての人生は、学業を終える頃から始まるようである。そうであるとして、わたしはすでに十年近い過去の殆どすべての人生を小説を書くこと、作家になることのためにのみ賭けてきたようなものだった。学校を卒業当時ちょっと教師をしたことがあるけれども、以後の大小すべての選択は、殆ど本能化したそのための判断によってなしてきた。書くうえでの時間や静かさや向上や刺戟や心身の栄養をあくどく求め、その半面では幸福な結婚生活に入るとか、経済的にも世間的にもまちがいのない一生の仕事に就くとかすることは、全く念頭になかった。作家になる才能がないとなれば、それまでやってきたことは一切が無駄であり、また転用のさせようもなく、自分の年齢からして最早やり直しは利かないのだ。その認識に直面するかもしれない

ことが、おそらくわたしには恐怖であったにちがいない。

そういうわけで、わたしは自分の才能について問い詰めることを常に避け続けていた。つまり、自分には才能がないとは、どうしても思えなかった。わたしは同人雑誌に初めて作品を発表したとき執筆者のなかで最年少だったことや、合評会で多少は賞(ほ)められる作品も書いたことや、支持を受けている先輩のあることや、有名雑誌の作品評に取りあげられたこともあることなど――後で知ってみれば実はそれだけではどうにもならない、ありふれたことどもに絶対の証拠であるかのように縋(すが)り、そうして自分には才能がないとは、どうしても思えなくなるのだった。

しかし、未だ世に出ていない以上、自分には才能があるはずだと思うことは、才能がないと思うよりも一層つらいことだ。何故ならば、才能がないと思いたくなければ、既に世に出ている人、取り分け新しく世に出た人の作品の弱味を漁(あさ)っては自分の才能を恃(たの)まなければならなくなる。そうなると、彼らの幸運を嫉(ねた)み、わが身の不運を呪(のろ)わねばならなくなる。わたしには、そんな不当な運命を自分の宿命として承服できなかった。

わたしは生業のために、昼間は勤務していた。わたしは教師をやめたあと三度職場を替えた。待遇や将来性、あるいは多くの女性が大きな条件に考えるといわれる結婚相手を見つける可能性、そうしたことは不問に付して、より仕事の密度の薄い職場が見つかるたびに転職して、小説を書くための毎日のエネルギーを少しでも多く残せるようにしてきたのだった。とはいえ、毎日の生活時間の最もたっぷりした部分を根こそぎ持ち去られることには変りはない。午後まだ日の高いうちには、夜には何でもやれそうに気力が充実しており、西日に変る頃にもまだ夜への期待の感じはあるのだが、実際に夜がきて帰り着くと、途中の混み合う乗物のせいなのか、とにかく一人分の俸給が支払われている以上はその日その日の労力の大半を取りあげられてしまうということなのか、残っているエネルギーは裁ちあとの残り布ほどの乏しさになってしまっているのがよくわかる。それが、一旦週末になると、疲れなどはどこを探しても見つからない。今生まれてきたばかりのように、体も頭もみずみずしく、力強い。自信が漲る。書くものの量はもちろん、週日とは歴然と質がちがった。せめて、週休が二日であればと、わたしはよく思ったものであった。一週間の休日が一日多いということ

は、休みの日が単に一日ふえることではないのだ。休日が一日ふえて、出勤日が一日減ることなのだ。一週間のうち五日しか出勤しないのに二日休日があるのと、六日も出勤して一日しか休みがないのと、その差をわたしは切実に思わずにはいられなかった。だが、その頃は外国系の職場ででもなければ、週休二日制はまだ試験段階でさえなかったのである。

週末のような毎日であったならば、才能がないとはどうしても考えられない自分は、今頃はすでに世に出ていたのではないだろうか。自分の不運は宿命ではあるまい。これまでのように、書いているのかいないのかわからぬような間遠な発表の仕方ではなく、印象の消えぬうちにうちにと発表してきていたならば、不運を断って機会を得ていたかもしれないのだ。だが、このまま機会の訪れを待って、そうなったうえで生業のための勤務を止めようというのであれば、このさき幾年たっても、どうにもならないのかもしれない。いや、そうであるにちがいないのだ。——

わたしには、その予想が次第に動かしがたいものに思えてきた。揚句に、とうとう退職した。わたしの生業用の職場としては、それ以上のところは二度と見つからない

であろうと思いながら……。

週末のような毎日が始まって、わたしは毎日眠りたいだけ眠り、最高の状態で机に向って、どれだけ夜中を過ぎようと明日の起床時間を考える必要もなく書きたいだけ書いた。そうして、床に就いてからも亢奮で眠れなければ、ほしいままに本を読んだ。あるべきようにあり得て、わたしはこうでなくてはならないと思った。

しかし、そういう生活になったからといって、すぐにも幸運が訪れるものでもない。三、四か月経ったばかりで、わたしは暮らしを案じなければならなくなった。退職以来、それまでに生業のための仕事としては、ある文筆家の口述筆記の仕事をごく短期間したことがあるだけだった。

わたしは二度と元の生活には戻りたくなかった。このまま、書き続けられるだけの僅かな生活費が得られさえすればいいのだが、普通の労働時間の半分だけですむような仕事はないものか。家で出来るそのような仕事はないものかと、わたしは友人知人に頼みまわった。彼等のなかには、まともに相談に乗ってくれる人もあるにはあった。が、直ちにわたしの願いが受け入れられ来月なり来々月なりには収入が手にできそう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な色よい話には出会えなかった。

いつか、わたしはパート・タイムという勤め方のあるらしいことを知るようになった。そういう雇傭がはじまった頃だったのかもしれない。週日半日ずつなり、週に三日程度なり勤めて、半人分の俸給が得られるならば、何よりだと、わたしは思った。が、世の中が人手不足になるのは、もっと後のことで、当時は求められているパート・タイマーは今のように多様ではなかった。わたしは実際に探しはじめてみて漸く知ったのだが、その時分のパート・タイムというのは、単に臨時雇傭のことだったのだ。一定期間、格別の廉い報酬で常勤すると、お払箱になるのである。時間の欲しいわたしは、こちらから時々お払箱にしてもらいたいほどなのだが、常勤中は普通並みの報酬が得られるのでなければ、折角のお払箱になっても、しばらくそれを重宝するための最低の手許の準備さえできていないことになる。

もっとも、当時といえども、わたしの夢みたようなかたちのパート・タイムが絶無というわけではなかった。たとえば、公営ギャンブルの賭金窓口係や場内放送係などがそれである。が、わたしは気づかなかった。

そうして、わたしは自分の労働時間を何とかして半分だけ買ってもらいたいものだとの願いから、やみくもに友人知人を煩わしていたのであった。

その日も、わたしはそうした用向きで、ある官庁に勤めている知人に勤め先へ会いに出かけた。行くのは、五度目であった。

彼は出版社やいくつかの団体にも繋がりの多い人であった。わたしは行くたびに、自分の願いとその理由を繰り返した。

最初に行ったとき、彼は、久しぶりによく来てくれたと歓迎した。わたしの用向きを聞くと、二、三心当たりがあるから早速に訊いておくと答え、それから、今度はゆっくり雑談をした。彼はその雑談に多分に熱中して見えたので、わたしは頼んだことを忘れられてしまうのではないかと気になった。別れ際、わたしはそのような用向きの訪問のあとに付け加える普通の挨拶以上に念を押し気味の挨拶をしようとした。が、口を突いたのは、「伺ってよかったと思います。是非ともよろしくお願いします」などと不器用で鈍い言葉でしかなかった。「そうね、問い合わせてみましょう。で、わ

かり次第、お知らせしますよ」と彼は答えた。

半月ほど待ったが、彼からは何の連絡もないので、わたしは行ってみた。留守で、明日まで関西へ出張なのだということだった。帰京早々には忙しいかもしれない。わたしは翌週、それも月曜日は忙しいであろうからと、火曜日になるのを待って訪ねて行った。彼は居て、まだ問い合わせる暇がなかったと答え、早速に訊いてみると言い、暫く関西の話をした。

翌週、わたしは今度は何故ともなく火曜日の次なる水曜日に訪ねて行った。「あちこち訊いてみているけれども、どうもなかなか……。又、そのうち心当たりを探してみます」と彼は答えた。それから、「そういう仕事を見つけるのは大変でしょうな。――いや、あなたのおっしゃることはよくわかる。そりゃ、あれば、ぼくだって乗り換えたいくらいだもの」と言って、威勢よく笑った。

その日、又しても彼を訪ねて行きながら、わたしは「丁度いいところへきた」などという彼の言葉はとても聞けそうにはない気持になっていた。彼はワイシャツ姿で自分の机の前にいた。が、わたしの姿を見ると、いつものように立ちあがって丁寧に頭

を下げたものの、それまでとはちがって、その場で手近の空いた机の前からするりと椅子を傍に引き寄せた。双方が椅子にかけると、「頤を出しますな」と彼は自分の頤を仰山に撫でて苦笑した。それは、わたしには冷笑のように見えた。

程なく、わたしは彼の部屋を出た。エレベーターのあるほうへ廊下を戻って行く。建物は古びて、薄汚れていた。が、その古び方、薄汚れ方が、却って建物の頑丈さを誇張して感じさせるところがあった。わたしは今更ながら、この前そこへ来た日の彼の言葉まで思いだしていた。そういう仕事があれば、ぼくだって乗り換えたいくらいだ——とは、よくも言えたものである。この建物にしっかり庇護されている身に自足しておりながら……。わたしの目下の立ち向っているもの、十年近く立ち向ってきたものは、その建物のようにやけに頑丈で、そうしてわたしには無縁なものかもしれなかった。わたしは、見るからにその建物に庇護され、馴れ親しんでいる様子の数人の人たちのあとからエレベーターに乗った。エレベーターもまた大きく、古び、薄汚れ、そしてやけに頑丈で、急ぐ必要のある人間のためのものではないと言いたげに、実にのろいのだ。

建物の出口にある広い石の段々を降り切って舗道を歩きはじめると、わたしは自分がどのような点でも、誰からも、何からも必要とされていないのだと徹底した実感を踏みしめている気がした。むしろ潔くて、身が緊まるようでさえあった。が、自分がそう感じただけのことであって、実はわたしの心は上ずっていたのかもしれない。わたしはハキハキした足取りで歩いていたが、行く先も定めずにひたすら進んでいたようであったから……。

気がつくと、わたしの行手には高い石段が聳えていた。わたしは来るのは初めてだったが、ある武将が急ぎの注進で馬に乗って駆けあがった話が歴史にある八十六の男坂の石段であることは知っていた。そこまで、わたしはバスの停留所の三つ分ほどを歩き続けていたことになるらしかった。その間に、わたしは幾分われを取り戻していたとみえる。来てしまったついでに上まで登ってみようか。わたしはもう無意識にではなく、そう思いつくと、石段際まで進んで一段ずつ登って行った。石段は数が多いだけではなく、一段一段が高く、勾配も急だった。わたしは途中で二度ほど、背後を

見おろした。手摺はない。足でも踏み損じて転がり落ちれば、どうしようもなさそうである。少し高所恐怖症の気味のあるわたしは、長い急な勾配を下に眺め、上に仰いで、もうこんなに、登ってしまったと思ったり、まだあんなにあると思ったりした。

そこを馬で駆けあがった武将は上まで躍りあがると、そのはずみで梅の枝を摑み、枝は手折れたという。漸く登り切ったわたしの目前に、なるほど梅の古木が二、三本植わっていたが、秋のこととて梅らしい風情はなかった。格式ありげな、だが大きくもない社殿がすぐ前にあるだけで、観るほどのものは何もなく、敷地も広くはない。それでも、下界の騒音も届かぬほどの高台なのと、人気がないのとで、登ってきた甲斐は少しはあった気はした。

社殿の右手のほうに、女坂のくだり口がある。わたしは周囲の様子をじきにひとわたり見渡してしまって、そちらへ歩を向けた。

女坂のこととて弛やかながら、坂はやはり坂である。わたしは何となく速度の加わりがちになる足取りで、カーブしているその道を下へと辿って行ったが、もう殆どおしまいというあたりまで来た時だった。恐らく、わたしよりも先にあの神社から降り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com